

# 木の日研修「玉川上水に見る江戸の生活」

【開催日】2018年6月7日(木)

【開催場所】林友ビル 6階会議室

【主催者】森林インストラクター東京会(FIT28にわとこ会)

【講師】石井誠治さん(FIT)

【一文紹介】玉川上水の歴史と文化(役割と変遷について)

【公開記事】

## ■玉川上水の完成まで

玉川上水は江戸時代の承応2(1653年)第4代将軍の徳川家綱の時代に当時の江戸の上水不足解消のために江戸幕府の命令より作られた。多摩川の羽村取水口から四谷大木戸までの素掘りによる水路で全長43km、標高差はわずか92m(羽村取水口標高127m、四谷大木戸標高35m、勾配1/1000)の緩勾配であった。自然流水を利用する導水路であった為、羽村からいくかの段丘を這い上がるようにして武蔵野台地の稜線に至り、神田川と北沢川に挟まれた尾根筋を巧みに引き回して四谷大木戸に到達した。完成翌年には石樋や木樋で作った配水管を布設し、江戸城を始め、市内の南西部一帯に給水した。取水口が決まるまで2回失敗を繰り返した。最後に選ばれたのは多摩川が草花丘陵にぶつかり流路を変える場所、羽村であった。

## ■玉川上水の恵み

地下水位が深く生活用水が得にくかった武蔵野台地に玉川上水は救いの水を分配した。玉川上水は当時の水道としては世界一の規模で幕末から明治初めにかけて日本に来た外国人を驚かせたのが、奈良の大仏と玉川上水であったと言われている。玉川上水には江戸時代33もの分水があった。最初の分水は野火止用水で松平信綱により小平監視所から埼玉県新座市を通り新河岸川(志木市)に続く用水路が開削された。他には青山, 三田, 千川の3上水や品川用水、下高井戸村や上北沢村, 境村等への分水があった。玉川上水沿岸の堤の強化と名所作りのため小金井堤は江戸一の桜の名所となり、明治時代になっても1日6万人もの花見客が来た。

## ■その後の玉川上水

昭和40(1965年)に武蔵水路が完成し、利根川の水が東京へ導かれるようになると玉川上水も小平監視所より下流は廃止となった。その後流れが途絶えていたが、玉川上水を愛する人々の尽力もあって昭和61(1986年)、清流復活事業により、昭島市の多摩川上流水再生センターで処理された再生水が18km下流の高井戸の浅間橋付近まで流され、最後は管路で神田川に合流している。

## ■最後に

講演を聴いて、玉川上水は江戸時代の庶民の生活と深く結びついているのが分かった。また東京の地形が西から東に少しずつ傾いているのも分かった。講師の石井さんは玉川上水近くの世田谷区上北沢で育たれ、玉川上水には非常に愛着があるご様子であった。講演の途中で、ご自宅の庭や散歩道で採取された樹木の葉を回覧して頂き、樹種を当てるクイズもあり、大変楽しい講演であった。

【報告者名】(28年)鍛冶健二郎



[講座風景その1]

【参加者数】38名



[講座風景その2]